

聖書：ヨシュア記8章30～35節

説教：主のために祭壇を築く

1 あらすじ

ヨシュア記は、四十年間偉大な指導力を発揮してきたモーセが亡くなった所から始まります。モーセの後をヨシュアが引き継ぐのですが、すぐに神からイスラエルはカナンの地に入るようにと促しがありました。ヨシュアは恐れます。指導者が交代したばかりです。ほんとうにヨシュアはやれるのか。人々は疑いの目で新しい指導者を見ている。そんな中でカナンへ入るといって一大事業を指揮しなければなりません。それに加えて不安なのは、カナンの地形です。一度前に進んだらどこにも逃げ場所がない。言わば、袋のネズミのような所です。戦いのことにかけて豊かな経験があるからこそ、そこがどれだけ危険なことなのかヨシュアには見えていたのです。それでも前に進まなければなりません。

最初の難関は、豊かに水が流れるヨルダン川を渡ることでした。次には、目の前に大きな壁となって立ちはだかるエリコを攻め落とさなければなりません。それが終われば今度はアイの町の攻撃です。一つとして簡単なことはありません。いつもぎりぎりの所を通され、そのたびごとに神の助けをいただきながらここまでやってきました。

大きな山は越えました。そのとき、ヨシュアはエバル山にイスラエルの神、主のために一つの祭壇を築きます。今日はそのことについて考えていきます。

2 モーセが命じたとおりに

1) エバル山とゲリジム山 (申命記11章29節)

まず祭壇を築いた場所のことからみましょう。31節に「主のしもべモーセがイスラエルの人々に命じたとおりに」とありますが、これはかつてモーセが申命記11章29節で命じたことを指しています。

みなさんの週報に簡単な地図を載せてあります。それを見てわかるように、この二つの山はエリコやアイの町からやや北側に位置しております。距離にして札幌と小樽くらい離れております。今なら車ですぐですが、ヨシュアの時代なら健康な大人でも一日はかかる距離です。それも安全な道ではありません。自分たちはよそ者です。カナンの地にイスラエルがやって来たことを歓迎する人たちはいません。周りは敵だらけです。そこまでして、なぜ祭壇を築くことにこだわるのでしょうか。そのことが一つの疑問です。

2) 祭壇を築く (申命記27章5～7節)

次に見たいのは、祭壇の造り方です。これについても申命記27章5～7節に書かれています。ヨシュアはそれに従って忠実に祭壇を築いています。鉄のみを当てていない自然の石です。当然、ごつごつして不格好です。祭壇にふさわしいとは思えません。どうしてそんな石を使うように言われたのか。そのことも不思議です。

3) 律法のことばを読み上げる (申命記31

章 11～13 節)

ヨシュアがやったことの三つ目。35 節。「モーセが命じたことばの中で、ヨシュアがイスラエルの全集会、および女と子どもたち、ならびに彼らの間に来る在留異国人の前で読み上げなかったことばは、一つもなかった。」

確かにこれもが申命記31章11～13節に書かれてあることです。今三つのことを見ましたが、ヨシュアがモーセが語ったことを忠実に守ろうとしていることは、これでわかるでしょう。

わからないのは、なぜそこまでこだわるのかです。偉大な指導者モーセのことばだから守らなければならない。そういうことでしょうか。もしそうならば、ヨシュアは意味もわからずに、先祖の言い伝えだからやっているだけだということになります。

世の中の習慣では、意味がわからないけれど親がやっていたからやっているということか結構あります。でも、聖書のことばはそのようなものでは決してないはずです。すべてには意味があります。すべては私たちのいのちと関係があるはず。ヨシュアは、ただ守りなさいと言われたので、そのとおりにしようとしたのではない。モーセの語ったことばの意味がわかり、納得してやっているはずです。彼は多くの試練を経験しながら、神という方はどのような方かを少しずつ学んでいったのです。モーセから聞いたときはぴんと来なかったことが、今は彼にとって手に取るようにわかるようになりました。では、何を知るようになったのか。そのことを見ていきます。

3 祭壇の意味

1) 今は祭壇がないのは

そもそも祭壇とは何でしょうか。仏教のお葬式にでると、式場の前に祭壇が飾られているのを目にします。提灯があつたり、建物の模型があつたり、それぞれにどんな意味があるのかよくわかりません。それでも、多くの方はありがたいと思って手を合わせます。

では聖書における祭壇はどんな意味を持つのでしょうか。もし目に見える祭壇に大切な意味があるとするなら、この礼拝の場にも祭壇がなければならないはず。ところが、皆さんの目の前には講壇があり、聖餐卓がありますが、祭壇ということではありません。ヨシュアがあれほどこだわった祭壇は、今はいったいどうなったのでしょうか。

2) アブラハムが築いた祭壇

祭壇がどのような意味を持っているのか、そのことを最も端的に教えている記事が、創世記22章9、10節にあります。「ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。」

聖書の中でも非常に印象的な場面として覚えておられると思います。主は、あるときアブラハムに「あなたの愛しているひとり子イサクを全焼のいけにえとしてささげるように」と言われます。アブラハムはそのみことばに従い、モリヤの地に行き、祭壇を築き、その上でひとり息子であるイサクをほふろうと刀を振り上げます。その瞬間、神はアブラハムの手を止め、イサクは死なずに済んだ。そのような場面です。

このことから何を教えられるのでしょうか。アブラハムにとって祭壇を築くことは難しいことではなかったでしょう。アブラハムにとって、最も難しかったことは、自分のひとり息子をささげることです。親であればだれでも思うでしょう。子どもが死にかけているなら、親は自分のいのちと引き替えにしても息子を救いたい。それなのに、神はアブラハムに愛するひとり子をささげなさいと、言われたのです。ひどい神だと思いませんか。

アブラハムが自分のひとり子をささげなさいと聞いたとき、どんなことを思ったのか、聖書には何も書いていません。書かれていないからこそ、私たちはそこで考えます。自分がもしアブラハムならどうしただろう。私がもしアブラハムならば、怒るでしょう。なぜそこまでしなければならぬのか。何の意味があるのか。神の胸ぐらをつかんで責め立てたくなるでしょう。そんなことをするなら、まず自分を殺せとさえ言うかもしれません。もし、神が一方的に「おまえの息子を差し出せ」と言われる方ならば、私は絶対にそんな神を認めたくありません。しかし、主はご自分の愛するひとり子を私たちに先立ってささげてくださったのです。自分なら怒り出すようなことなのに、神は進んでひとり子を全焼のいけにえとして差し出されました。

ここまで、祭壇に注目してきました。でもアブラハムのことをよく読むと、祭壇というよりも祭壇の上で何がささげられるのか。そのことのほうがもっと重要であることがわかりいただけると思います。

先ほど、祭壇には鉄の道具を当てない自然の石を使うと言いました。どうしてそんな格好の悪いものを使うのか。理由がここにあります。祭壇を飾っても意味がないからです。

むしろ、祭壇に目が留まることを防ぐ意味で、あえて不格好なものを使わせようとしたとも言えるでしょう。

4 ヨシュアがささげる全焼のいけにえ

ヨシュアは、エバル山のふもとで祭壇を造り、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげます。すべてモーセの命じられたとおりでした。いけにえをささげながら、ヨシュアはここまでの道のりをふり返ります。その中でも強い印象を刻んだ出来事は、おそらく5章13節に出て来る「主の軍の将」と呼ばれる方のことだったろうと思います。この方はヨシュアの前に抜き身の剣を手にして突然に現れ、「あなたの立っている場所は聖なる所である」と言われました。明らかにこの方は神なのです。その方は、その後聖書には登場しません。でも、見えない姿となられてヨシュアの前に立ち、あらゆる敵と戦ってくださいました。おかげで、イスラエルは無事にカナンの地に入ることはできました。

でも、それでめでたしめでたしということにはなりません。あまりにも多くの血が流されました。エリコもアイの人々も神に敵対する頑なな人々であったかもしれませんが、女も子どももひとり残らず殺されました。あまりにもひどいやり方に疑問を覚えました。

主はそのことをどのように考えておられたのでしょうか。もう二度とこのような残虐なことは起きてはならない。これが主の御思いです。主に背く者をも救わなければならない。そのために、主ご自身が私たちの所へ来られ、救いのみことばを語り、祭壇の上で焼かれなければならない。それが神の救いのご計画でした。だから主は私たちのところに来られたのです。

ヨシュアは、やがて来られる救い主のことを仰ぎ見、主よ来てくださいと祈りながら、祭壇を築きました。

でも、今私たちは祭壇を築くことはありません。なぜであるかはもうおわかりでしょう。すでに主が十字架におかかりになり、完全な全焼のいけにえとしてささげられたのでもう祭壇は必要ありません。

今朝、十字架の意味をもう一度味わいたいと願います。